

司 法 試 験

論文過去問  
徹底解析

[系統別] + [年度別]

刑事系

刑法・刑事訴訟法



LEC 東京リーガルマインド 編著

# は し が き

平成 18 年度にスタートした新司法試験は、平成 23 年 5 月の実施で、第 6 回を数えるまでになり、その出題傾向等は、ほぼ固まりつつあります。

旧司法試験と異なり問題文中に事実関係や資料が多く盛り込まれ、これらを短時間で取捨選択しつつ、時間内に答案に仕上げていくことが求められる新司法試験においては、何より、出題された膨大な問題文・資料をスピーディーに処理していくことが重要です。

そこで、本書は、平成 18 年度から平成 22 年度までの 5 年間の新司法試験の問題を詳細に分析し、問題文の重要箇所を強調して目立たせるとともに、上位合格レベルの答案作成のポイントを具体的に示すことによって、確実に時間内に合格レベルの答案を作成する能力を皆様に身に付けていただくように構成いたしました。

さらに、法務省発表の新司法試験関係資料を掲載し、試験委員の出題意図・採点実感とのクロスチェックができるようにいたしました。

本書をご活用いただくことにより、皆様が必ずや新司法試験に合格されるものと確信いたしております。

2011 年 9 月吉日

株式会社 東京リーガルマインド  
LEC 総合研究所 司法試験部

# 本書の効果的活用法

平成 18 年度  
(2006 年度)

## 第 1 問

甲の丁に対する傷害罪の成否については、正当防衛の成立要件である「急迫性」「防衛の意思」「相当性」について、問題文の具体的事実を評価してあてはめることが求められています。さらに、甲の丙に対する行為については、致命傷となった頸動脈損傷が甲・乙いずれの行為によるものか特定できないため、死亡結果につき甲に責任を負わせることができるかが問題となります。

乙については、承継的共同正犯の成否、刑法 207 条を傷害致死罪に適用できるか、が問題となります。

各問題の先頭に、出題傾向、答案作成上の注意等を掲載しています。

新司法試験論文式問題を本試験と同じ形式で掲載しています。答案作成練習にご活用下さい。

### 問題文 (配点: 10)

次の【事例】を読んで、後記(設問1)及び(設問2)に答えなさい。

【事 例】

1 A市B町は、約1キロメートル四方に広がる住宅街であるが、B町内では、平成19年3月7日午前1時10分ごろ、P駐車場において、駐車車両1台から不審火が発生し、続いて、同年3月16日午前3時45分ごろ、Q駐車場において、駐車車両1台から不審火が発生した。各不審火は、幸い早期に発見、消火されたため、出火元の車両各1台を焼損したにとどまり、他の車両や住宅等への延焼を免れた。

P及びQ駐車場は、いずれもB町内の住宅南側にあり、多数の本造住宅が各駐車場に隣接していた。また、いずれも、管理人が常駐しておらず、だれでも自由に入出入りすることができる屋根のない駐車場であり、出火当時、焼損した各車両に隣接する駐車区画を含め合計数台の車両が駐車されていたが、焼損した各車両はいずれもC社製高級外車であった。

また、それら車両には、いずれも、そのドアに銀利な金属製の物で付けたと認められる長さ数十センチメートルの複数のひっかき傷があった上、火元の前部バンパー付近からベンジンの成分が検出された。ベンジンは、石油を蒸留して得られる、揮発性が高く引火しやすい液体であり、染み付きの溶剤やカイロの燃料等に用いられている。さらに、出火した各車両及びその周辺には、自然発火の原因となるようなものはなく、出火前には、ドアのひっかき傷も、前部バンパー付近にベンジンが付着するような事情もなかった。

警察は、いずれの不審火も、ベンジンを用いた放火であるとの疑いを強め、捜査を行った結果、Q駐車場付近の住人が、同駐車場における出火前日の同年3月15日午前3時ごろ、B町内に居住する甲が一人で同駐車場内をしばらく歩き回った上で立ち去るのを目撃していたこと、甲は同駐車場に駐車区画を賃借していないことが各判明した。

そこで、甲について捜査したところ、甲は、B町のほぼ中心に位置する2階建てのDアパート1階の1室に一人で居住している25歳の男性であり、同年2月初めころから、週に2、3日、昼間の数時間、同町内のクリーニング店において、洗濯作業補助のアルバイトをしていることが判明したが、それ以上には犯人の特定につながる証拠は得られなかった。

2 その後、同年3月21日午前2時35分ごろ、B町内のR駐車場に駐車中のC社製高級外車が焼損する不審火が発生した。

同駐車場も、B町内の住宅南側にあって、多数の本造住宅がこれに隣接していた上、管理人が常駐しておらず、だれでも自由に入出入りすることができる屋根のない駐車場であった。また、同駐車場は、出火当時、十数台の駐車車両でほぼ満杯であった。焼損した車両の右側ドアには、出火前にはなかった長さ約30センチメートルないし50センチメートルの5か所のひっかき傷が残っていた上、火元の前部バンパー付近から出火前には付着するような事情がないベンジンの成分が検出された。出火した車両及びその周辺には、自然発火の原因となるようなものはなかつ

74

LEC 東京リーガルマインド 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

### 問題文 (重要箇所を強調 ver.)

答案内で検討すべき事実

次の【事例】を読んで、後記(設問1)及び(設問2)に答えなさい。

【事 例】

1 A市B町は、約1キロメートル四方に広がる住宅街であるが、B町内では、平成19年3月7日午前1時10分ごろ、P駐車場において、駐車車両1台から不審火が発生し、続いて、同年3月16日午前3時45分ごろ、Q駐車場において、駐車車両1台から不審火が発生した。各不審火は、幸い早期に発見、消火されたため、出火元の車両各1台を焼損したにとどまり、他の車両や住宅等への延焼を免れた。

P及びQ駐車場は、いずれもB町内の住宅南側にあり、多数の本造住宅が各駐車場に隣接していた。また、いずれも、管理人が常駐しておらず、だれでも自由に入出入りすることができる屋根のない駐車場であり、出火当時、焼損した各車両に隣接する駐車区画を含め合計数台の車両が駐車されていたが、焼損した各車両はいずれもC社製高級外車であった。

また、それら車両には、いずれも、そのドアに銀利な金属製の物で付けたと認められる長さ数十センチメートルの複数のひっかき傷があった上、火元の前部バンパー付近からベンジンの成分が検出された。ベンジンは、石油を蒸留して得られる、揮発性が高く引火しやすい液体であり、染み付きの溶剤やカイロの燃料等に用いられている。さらに、出火した各車両及びその周辺には、自然発火の原因となるようなものはなく、出火前には、ドアのひっかき傷も、前部バンパー付近にベンジンが付着するような事情もなかった。

警察は、いずれの不審火も、ベンジンを用いた放火であるとの疑いを強め、捜査を行った結果、Q駐車場付近の住人が、同駐車場における出火前日の同年3月15日午前3時ごろ、B町内に居住する甲が一人で同駐車場内をしばらく歩き回った上で立ち去るのを目撃していたこと、甲は同駐車場に駐車区画を賃借していないことが各判明した。

そこで、甲について捜査したところ、甲は、B町のほぼ中心に位置する2階建てのDアパート1階の1室に一人で居住している25歳の男性であり、同年2月初めころから、週に2、3日、昼間の数時間、同町内のクリーニング店において、洗濯作業補助のアルバイトをしていることが判明したが、それ以上には犯人の特定につながる証拠は得られなかった。

2 その後、同年3月21日午前2時35分ごろ、B町内のR駐車場に駐車中のC社製高級外車が焼損する不審火が発生した。

同駐車場も、B町内の住宅南側にあって、多数の本造住宅がこれに隣接していた上、管理人が常駐しておらず、だれでも自由に入出入りすることができる屋根のない駐車場であった。また、同駐車場は、出火当時、十数台の駐車車両でほぼ満杯であった。焼損した車両の右側ドアには、出火前にはなかった長さ約30センチメートルないし50センチメートルの5か所のひっかき傷

LEC 東京リーガルマインド 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

75

問題文及び資料の重要箇所をアンダーラインで強調しました。膨大なデータから、合格答案作成に必要なデータを取捨選択することができるよう、重要箇所を示しました。是非ご参考にして下さい。

## 設問の形式と時間配分

### 〔設問形式について〕

2007年度と同様、捜査の適法性に関する問題と、証拠能力に関する問題が1問ずつ出題されています。証拠能力については、実際の日記の文章が資料として与えられているので、どのような点で伝聞性があるのかを丁寧に検討することが要求されます。その点で実務的なセンスを試していると言えます。

### 〔時間配分について〕

事例及び添付資料の分量はそれほどありません。10分程度で読めるでしょう。設問1では、立証趣旨を意識した上で、証拠能力を認めるための伝聞例外の規定を指摘し、本件でその要件を満たすかを検討することが求められています。非常にシンプルな問題だといえるでしょう。

本問でのポイントは、立証趣旨をどう捉えるか、正確に伝聞例外の条文を挙げているか、説得的な点ではあてがえているか、です。基本的な部分であるだけに、丁寧に論証を心掛ける必要があります。

また、これは新司法試験全体の傾向としていえることで、本問でも、あてはめ部分に大きな比重が置かれているといえます。このような問題では、問題文中の事柄をできるだけ使うようにしてください。問題文を読み進めていくと同時に、後にあてはめで使えるような具体的事柄を細かくチェックしておく習慣をつけるとよいでしょう。

次に設問2ですが、本問における捜査の問題点は比較的明らかです。いずれも典型論点なので、ここでは答案構成にはあまり時間はかからないでしょう。とはいえ、実際に書いてみることで意図と時間がかかってしまうものです。素早く答案構成して、答案作成の時間を十分に確保しておく必要があります。

設問形式の分析及び時間配分の注意点を示しました。

LEC 専任講師が、合格レベル答案に達するために求められる論述内容を詳細に解説しました。法務省発表の出題趣旨との対照により、多面的な問題分析が可能です。

## 合格答案のポイント

## 合格答案のポイント

### 〔出題の趣旨〕

① 本問は、捜査・裁判に関する具体的事例を示して、そこに生じる刑事手続上の問題点の解決に必要な法解釈、法適用によって重要な事象の分析・評価及び事象の帰結に至る過程を論述させることにより、刑事訴訟法等の解釈に関する学識と適用能力及び論理的思考力を試すものである。

② 設問1は、殺人及び死体遺棄事件を素材として、被疑者甲の共犯者乙が経営する下化品販売株式会社を違法に発行された捜査差押許可状に基づいて捜査した際に行われた様々な写真撮影について、その適法性を論じさせることにより、捜査差押えという強制処分の過程における写真撮影の法的性質についての考え方、ひいては令状主義及び刑事訴訟法第218条第1項の定める捜査、差押え及び検察についての正確な理解と事象の適用能力を試すものである。

③ 捜査差押えに行われる写真撮影の適法性については、当該写真撮影が捜査差押えに付随する処分として許される場合があるとの見解や捜査差押えの意義・内容からその本来的効力として写真撮影が許されるとする見解などがあられるが、いずれにせよ、まず、令状主義の意義と趣旨に立ち帰ってこの問題に関する自らの基本的な立場を刑事訴訟法の解釈として論ずる必要がある。その上で、

### 〔設問1について〕

まず、最初に写真撮影が検証に準じ、強制処分にあたることを確認します。写真撮影によってプライバシーが侵害されるおそれがあるので、強制処分にあたるべきでしょう。とすると、強制処分法定主義から、写真撮影の条上の根拠が問題となります。捜査差押令状の効力として写真撮影を認めるというのが実務・通説です〔必要な処分〕（刑事訴訟法222条1項、111条1項）として認める説は少数説です。

そこで、（いずれの説に立つにせよ）令状の効力としてどこまで許されるか検討していくことになります。この点、令状記載の差押目的物以外は一切禁止する説もあり得ます。しかし、あまりにも硬直的で、捜査段階で一定の証拠を確保し、真実発見を達成するという見地からは一定の例外を認めるべきでしょう。具体的には、固執状況、執行状況を認めることに一定の合理性が認められる場合には、殊更に捜査差押許可状に記載されていないものを撮影する等、一般的捜査にわたるような態様でない限り、写真撮影は許容されると解します。

以下、捜査差押許可状により許容されたプライバシー侵害の範囲に包摂されるか否か、個別的に検討していきます。

## 答案構成

## 答案構成（平成20年度 第2問）

### 第1 設問1

#### 1 本件ノートの証拠能力

本件ノートの伝聞性にあたり、原則として証拠能力が否定されるのではないかと

伝聞法則（320条1項）の意義

→原則、証拠能力は否定

326条1項の同意もないので、伝聞例外（321条以降）の検討

#### 2 立証趣旨

① Wが平成20年1月14日に甲で本件差押え用を発見して甲と会話した状況

② 本件差押え用を甲が乙から入手した状況

③ X組が過去に差押え用を密売した際の売却価格

#### 3 立証趣旨との関係

(1) Wと甲がどのような状況で会話したのかについては、本件ノートの記載内容の真実性を問題とするもの

↓

立証趣旨①との関係では本件ノートは伝聞証拠にあたる

↓

本件ノートは「被告人以外の者が作成した供述書」にあたるので、321条1項3号の要件を満たす場合に、伝聞例外

(2) A Wはすでに死亡

イ 犯罪事実立証のために本件ノートの記載が不可欠  
ウ 「信に信用すべき状況の下にされたもの」であるかの検討

その存在は、供述内容そのものを直接に判断するのではなく、外部的な状況を主たる考慮要素として判断すべき

↓

本件の事情をあてはめ

↓

伝聞例外として証拠能力が認められる

#### 4 立証趣旨との関係

(1) 甲が乙から本件差押え用を入手した状況は、甲の発言内容の真実性を問題とするもの

↓

伝聞証拠→伝聞例外の要件を満たすかを検討

↓

本件ノート記載の甲の発言は、再伝聞

全ての問題で答案構成（平成18年度は「答案構成 詳細版」）を作成しました。合格レベル答案の骨格をイメージしてください。

## 優秀レベルの答案 (平成 21 年度 第 2 問)

### 第 1 設問 1

1 Pらのした写真撮影は違法か。

そもそも写真撮影は検証としての作用を有するので、検証許可状を要するのが筋ではある。

しかし、捜索差押許可状に基づく捜索差押の際の写真撮影は、当該捜索差押の状況を記録するための付随手段としてなされる限り、「必要な処分」(刑事訴訟法<以下法令略>222条1項、111条1項)として許容される余地がある。

他方、付随手段にとどまらず、写真撮影の目的物の証拠価値を把握するような捜索差押類似の方法・態様でなされる場合には、令状主義を消滅するものとして違法となると解する。

なぜなら、令状主義(憲法35条、法218条)の趣旨は恣意的捜索差押を防ぎ被疑者の防御権を保障する点にあるところ、付随手段でなされる限定的恣意的捜査に流用されるおそれはないし、捜査の適正を担保することも被疑者の防御権保障にも資する。しかし、目的物を捜索差押するのと同様の効果を狙い、目的物の証拠価値を把握するような態様で写真撮影することは、令状による司法審査が及ばない恣意的捜査を許し被疑者の防御権を害する結果となるからである。

以下、各写真につき撮影の違法性を検討する。

### 2 写真①

(1) T社事務所の壁に書かれた文字を消した跡を撮影した写真である。

前提として、捜索差押許可状の発行はT社の「看守者」たる乙に「代るべき者」(222条1項、114条2項)たるT社従業員Bを立ち会わせて行なわれているので、この点は問題ない。

(2) では撮影された文字は「差し押さるべき物」(219条1項)に含まれるか。含まれない場合には「必要な処分」として観念する余地がなくなるので問題となる。

この点、資料2の捜索差押許可状には、「差し押さるべき物」として壁に書かれた文字は直接含まれていない。

④原則から考える姿勢は高評価である

④撮影から論じており、好印象。刑訴では、大原則から考えることが重要である

④規範にあたる部分。分らない問題でも、本答案のように撮影から考えて自分なりに規範を立てることが重要

④この点は、必須ではない。余裕があればよい

④資料を使えており、好印象

各問題(平成18年度を除く)に優秀レベルの答案を掲載しました。加えて、平成21年度・22年度については、合格者の再現答案も掲載しております。各答案にはサイドコメントを付し、答案の優れている点・改善すべき点を記載しています。

## 再現答案 (平成 21 年度 第 2 問 172 位相当)

### 〔設問 1〕

第1 まず、個人の職場内を無断で写真撮影を無断で行うことは、個人のプライバシーという重要な権利を侵害するものといえ、強制処分にあたる(刑事訴訟法(以下略)197条1項ただし書)。そして、その基本的な性格は、五感の作用により対象を感知するものであるから、検証(218条1項)である。よって、捜査機関に対する司法の統制をかけるべきことを定める令状主義により、検証令状(218条1項)によるべきであるのが原則である。

もっとも、差押目的物が発見された位置や発見時の状態に重要な意味があり、その場合、差押に「必要な処分」(222条1項、111条)として、差押令状により写真撮影を例外的に行うことができる。そして、その「必要な処分」の意義については、明文上明らかではないが、写真撮影の必要性、相当性がある場合に限ると解する。

第2 以下、本件についてこれを見る。

### 1 写真撮影①

#### (1) 必要性

①については、カレンダーを外すと、コンクリートの壁にボールペンで書かれた文字を消した跡がある。その跡は、「1/12△フドウ」となっており、△については読み取れなかった。そして、資料1の甲の供述調書より、平成21年1月11午後9時ころ、甲乙間で「明日の夜、M邸前で車の転落事故を誘ってVを殺す」とことについての共謀が疑われている。このような状況では、△はMとある蓋然性が高く、これは、本件被疑事件の殺人事実についての犯行現場である可能性が高い。以上より、本件撮影の必要性は高い。

#### (2) 相当性

次に、本件はコンクリートの壁にボールペンで書かれた文字を消した跡を撮影している。そして、コンクリートは、T

④原則論として、写真撮影が「検証」に該当することを認定している点は評価できる

④写真撮影の必要性、相当性という要素をもう少し踏み込んで説明すべき

④理由がない

④事実をよく分析して、自分なりに評価を加えている点は好印象。要力を働かせる記述である

## 再現答案

でかつ重大な犯罪が問題となっており、秘密録音をする必要性・緊急性・相当性が認められる。よって、当該録音は任意捜査の限界内といえ、違法である。

(3) 以上より、当該捜査報告書は証拠禁止とならず、証拠能力が認められる。

以上

### 〔講評〕

★ 設問1において、ごみ袋を持ち帰ったり、ごみ袋を捜索してメモ片を差し押さるあたり、といった行為が任意処分の限界として許されるか、を具体的に論じている。もっとも、捜査③の、消去されたデータの復元・分析については、捜索差押許可状の効力として許されるか、という観点での検討がなく、減点になったと思われる。

★ 設問2において、甲乙間の会話・甲内閣の会話部分と、乙の説明部分とを区別して、真実性が問題となるか否かを検討している点は、非常に好印象。おとり捜査や秘密録音の違法性についても、必要十分な検討がされている。

■第2問準拠で評価した場合、200位程度の優秀答案。

④必要性・緊急性・手段の相当性について、より事実に則したあてはめができると、なおよかった

214

LEC東京リガルマインド 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

再現答案(平成21年度・22年度)には、全体講評を付すとともに、答案ごとの推定順位を明記しました。

平成22年度

LEC東京リガルマインド 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

293

293

【刑事系科目】

〔第 1 問〕

いて甲が刑事責任を負う否かに關し、いかなる理論構成によるべきか、同要正罪や共犯の各成立要件を踏まえて検討することが必要である。その際、正犯がだれであるか問題とし、甲を教唆犯、乙を正犯とする考え方は、甲を間接正犯、乙を故意なき助動員とする考え方などがあり得るところ、後者の考え方によるには甲が正犯性を認識している点や乙に正犯性を認め得る点ではいかにその点と隔ちるとし得ることに留意する。本問の具體的事実事件に即して論理的に考察することが求められている。さらに、乙による120万円の私取行為に關する甲の刑事責任について、前記で考察する理由に因果関係や故意を否定し得るのかどうかの検討も重要である。

⑤ また、甲乙の罪責に関する構成によっては、共犯と身分に関する処理が必要となろう。

5. 問題文後半は、甲乙のいわゆる狂言行為について、いかなる犯罪が成立するか、主として財産犯以外の

各論の基礎的な知識と当てはめの能力を問うものである。

具体的には、監禁罪、偽計業務妨害罪、その他の国家的法益に対する罪等の成否が問題とならぬ幾つもの事実関係の中から、問題文において詳細に事実点が提示されている甲乙の行為で、理論上重要な事実点を含む事項について犯罪の成否を論述することが求められている。取り分け、甲乙が自動車のトランクに閉じ込められた行為について、これを考慮していることが監禁罪の成否に与える影響に関する理論的な対立に留意しつつも、本問の具体的な事実関係において当該理論がどのように適用されるべきかを注意深く検討することが必要であろう。

⑧ 最後に、甲乙に成立する犯罪相互の関係に留意して罪数判断を示すことも必要である。論述においては、

④ また、既知の判例や典型事例等の結論を、それが前提とすべき事実関係や本邦の事実関係と自らと十分一致し、少なくとも当てはまり、準に、自らと異なる

年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

## LEC 東京リーガルマインド 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

法務省発表の新司法試験関係資料を全て掲載し、重要部分にアンダーラインを引きました。

## 資料

なければならない。このような答案について、あえて厳しい評価をすれば、事案分析能力・思考能力の不備・欠如を露呈するものと言わざるを得ない。

3 今後の法科大学院教育に求めるもの  
このような結果を踏まえて、今後の法科大学院教育

においては、手続を構成する制度の趣旨・目的を基本から正確に理解し、これを具体的事例について適用できる能力を身に付けること、前述した論理的文章を書く能力を身に付けること、重要な判例法理を正確に理解し、具体的事実関係を前提としてする判例の射程範囲を正確に把握することなどが要請される。特に、実務教育の更なる充実の観点から基本に立ち寄り、通常の刑事手続、すなわち当たり前の手続の流れを正確に理解しておくことが、当然の前提として求められるであろう。

## ( ) 委員長 ( ) 委員 ( ) 考査委員

( )委員長 ( )委員 ( )審查委員

提もないように考えた。その意味では、私の意見としては、受験者は受験者なりに健闘していたと思う。

[illegible]

## LEC東京リーガルマインド 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

# 目 次

## 平成 18 年度 (2006 年度)

第 1 問 .....	1
第 2 問 .....	23
資 料 .....	43

## 平成 19 年度 (2007 年度)

第 1 問 .....	51
第 2 問 .....	73
資 料 .....	95

## 平成 20 年度 (2008 年度)

第 1 問 .....	103
第 2 問 .....	123
資 料 .....	147

## 平成 21 年度 (2009 年度)

第 1 問 .....	155
第 2 問 .....	185
資 料 .....	220

## 平成 22 年度 (2010 年度)

第 1 問 .....	229
第 2 問 .....	261
資 料 .....	294

平成 18 年度  
(2006 年度)

# 第 1 問

甲の丁に対する傷害罪の成否については、正当防衛の成立要件である「急迫性」「防衛の意思」「相当性」について、問題文の具体的事実を評価してあてはめることが求められています。さらに、甲の丙に対する行為については、致命傷となった頸動脈損傷が甲・乙いずれの行為によるものか特定できないため、死亡結果につき甲に責任を負わせることができるかが問題となります。

乙については、承継的共同正犯の成否、刑法 207 条を傷害致死罪に適用できるか、が問題となります。

以下の【捜査の端緒及び経過】、【逮捕後の甲の供述要旨】、【逮捕後の乙の供述要旨】及び【丁の供述要旨】に基づき、甲及び乙の罪責について、具体的な事実を示して論じなさい（ただし、特別法違反を除く。）。なお、各供述要旨の内容は信用できるものとする。

## 【捜査の端緒及び経過】

### 1 捜査の端緒

平成18年2月6日午後9時5分、110番通報を受けたJ県警察本部通信司令室から管内M警察署に、「M町の中央公園東側路上で男性三人のけんか。そのうち一人が負傷した模様。現場に急行せよ。」との指令があった。

### 2 捜査の経過及び結果

#### (1) 捜査の経過

ア 同日午後9時10分ごろ、M警察署の警察官らがM町内の中央公園に臨場したところ、男性丙が頸部付近から大量の血を流して公園東側路上に倒れており、丙のそばに二人の男性（甲及び乙）が立っていた。付近の路上に、刃に真新しい血痕が付着したカッターナイフ（柄の長さ15.2センチメートル、刃の長さ8.5センチメートル）が落ちていた。カッターナイフの刃は柄の部分から約3センチメートル出ていた。

イ 警察官の事情聴取に対し、甲は「会社の寮の前で丙、丁とけんかになりました。丙に暴力を振るわれたので公園まで逃げてきましたが、丙が追い掛けてきたので持っていたカッターナイフで丙を切り付けました。また、乙さんも同じカッターナイフで丙を切り付けました。」と述べた。また、乙は「寮の前で甲が丙、丁とけんかをしていたので仲裁をしました。いったんは収まったのですが、再びけんかを始めた上、丙が言うことを聞かなかったので、頭にきて甲のカッターナイフで丙を切り付けました。」と述べた。

ウ 警察官は、甲と乙が前記のような供述をした上、両名の衣服に真新しい血痕の付着を認めたので、午後9時40分、両名を傷害の現行犯人として逮捕し、現場に落ちていた前記カッターナイフを差し押さえた。

#### (2) 丙の死因

ア 丙は28歳の男性で、健康状態に全く異常はなかった。同日午後9時15分ごろ、救急車が現場に到着し、丙をM町内の病院に搬送したが、同日午後11時55分ごろ、丙は同病院内で死亡した。

イ 司法解剖等の結果、丙には、左頸部に長さ約7センチメートルの切創があり、頸動脈を損傷していること、左上腕部に長さ約4センチメートルの切創があること、丙の死因は前記頸動脈損傷による失血死であること等の事実が判明した。

## (3) 捜査の結果

ア 捜査を継続したところ、丁の供述から、同人が甲に左腕をバットで殴られた事実が判明するとともに、甲らが居住する独身寮玄関前の路上に落ちていた軟式野球用木製バット(長さ約85センチメートル、重さ約800グラム)を発見し、領置した。また、丁から「加療約2週間を要する左上腕部打撲」との内容の診断書の提出を受けた。なお、甲も左上腕部に軽度の打撲傷を負っていた。

イ 甲及び乙の逮捕後、甲、乙及び丁から供述を録取するなどして捜査を遂げたが、丙の左頸部及び左上腕部の各切創については、①各切創とも、甲、乙いずれの切り付け行為によって生じたものか、その特定はできず、②各切創の位置関係からみて、1回の切り付け行為によっては生じ得ないことが判明した。

## 【逮捕後の甲の供述要旨】

1 私は現在30歳で独身である。平成15年4月にT株式会社に就職し、配送課所属のトラック運転手として働いており、会社の独身寮2階に住んでいる。丙は同時期に入社した同僚で、同じ寮の1階に住んでいる。丙は私より2歳年下である。私と丙は日ごろから仲が悪かった。平成17年6月ごろ、私が丙の仕事ぶりに苦情を言ったところ、丙が怒り出してつかみ合いの大げんかになったが、身長165センチメートルの私に比べ、丙は身長180センチメートルくらいあり、体力的に私より勝っていた上に、柔道の経験があったため、私は丙に組み伏せられた。これ以外にも、何度かけんかをすることがある。

丁も同じ寮の1階に住む仕事仲間で、私より2歳年下である。丁は丙の親友であり、丙が私と仲が悪かったため、丁も私とほとんど口をきかなかった。なお、丁の身長は約170センチメートルで、体力的に私より勝っていたと思う。

2 平成18年2月6日午後6時ごろから、M町内の飲食店で、配送課の懇親会があった。懇親会が終わりかけたとき、ほろ酔い加減になった丙が私に因縁を付けてきた。私が言い返したらけんかになり、私は丙に顔をこぶしで殴られ、畳の上に身体を押さえ付けられた。この場合は、配送課長の乙さんが仲裁に入ってくれたので、何とか収まった。私は乙さんに「ひと足先に帰宅した方がよい。」と言われたので、懇親会が終わる前に一人で帰った。

3 私は午後8時ごろタクシーで帰宅し、その後、寮2階の自分の部屋でテレビを見ていたところ、午後9時前ごろになって、丙と丁が談笑する声が寮の前の路上から聞こえてきた。私は丙らの笑い声を耳にして怒りが込み上げ、自室のベランダに飛び出して、路上にいた丙らに対し「さっきは何で殴ったんだ。謝れ。」と怒鳴りつけた。すると、丙は「ふざけるな。謝ってほしければ下に降りて来い。」と怒鳴り返してきた。また、丙と一緒にいた丁も「さっさと降りて来い。」と大声で言い返してきた。私は謝るどころか逆に私をばかにしたような丙と丁の態度

## 問題文 (重要箇所の強調 ver.)

答案内で検討すべき事実

以下の【捜査の端緒及び経過】、【逮捕後の甲の供述要旨】、【逮捕後の乙の供述要旨】及び【丁の供述要旨】に基づき、甲及び乙の罪責について、具体的な事実を示して論じなさい（ただし、特別法違反を除く。）。なお、各供述要旨の内容は信用できるものとする。

### 【捜査の端緒及び経過】

#### 1 捜査の端緒

平成18年2月6日午後9時5分、110番通報を受けたJ県警察本部通信司令室から管内M警察署に、「M町の中央公園東側路上で男性三人のけんか。そのうち一人が負傷した模様。現場に急行せよ。」との指令があった。

#### 2 捜査の経過及び結果

##### (1) 捜査の経過

ア 同日午後9時10分ごろ、M警察署の警察官らがM町内の中央公園に臨場したところ、男性丙が頸部付近から大量の血を流して公園東側路上に倒れており、丙のそばに二人の男性（甲及び乙）が立っていた。付近の路上に、刃に真新しい血痕が付着したカッターナイフ（柄の長さ15.2センチメートル、刃の長さ8.5センチメートル）が落ちていた。カッターナイフの刃は柄の部分から約3センチメートル出ていた。

イ 警察官の事情聴取に対し、甲は「会社の寮の前で丙、丁とけんかになりました。丙に暴力を振るわれたので公園まで逃げてきましたが、丙が追い掛けてきたので持っていたカッターナイフで丙を切り付けました。また、乙さんも同じカッターナイフで丙を切り付けました。」と述べた。また、乙は「寮の前で甲が丙、丁とけんかをしていたので仲裁をしました。いったんは収まったのですが、再びけんかを始めた上、丙が言うことを聞かなかったので、頭に来て甲のカッターナイフで丙を切り付けました。」と述べた。

ウ 警察官は、甲と乙が前記のような供述をした上、両名の衣服に真新しい血痕の付着を認めたので、午後9時40分、両名を傷害の現行犯人として逮捕し、現場に落ちていた前記カッターナイフを差し押さえた。

##### (2) 丙の死因

ア 丙は28歳の男性で、健康状態に全く異常はなかった。同日午後9時15分ごろ、救急車が現場に到着し、丙をM町内の病院に搬送したが、同日午後11時55分ごろ、丙は同病院内で死亡した。

イ 司法解剖等の結果、丙には、左頸部に長さ約7センチメートルの切創があり、頸動脈を損傷していること、左上腕部に長さ約4センチメートルの切創があること、丙の死因は前

記頸動脈損傷による失血死であること等の事実が判明した。

(3) 捜査の結果

ア 捜査を継続したところ、丁の供述から、同人が甲に左腕をバットで殴られた事実が判明するとともに、甲らが居住する独身寮玄関前の路上に落ちていた軟式野球用木製バット（長さ約85センチメートル、重さ約800グラム）を発見し、領置した。また、丁から「加療約2週間を要する左上腕部打撲」との内容の診断書の提出を受けた。なお、甲も左上腕部に軽度の打撲傷を負っていた。

イ 甲及び乙の逮捕後、甲、乙及び丁から供述を録取するなどして捜査を遂げたが、丙の左頸部及び左上腕部の各切創については、①各切創とも、甲、乙いずれの切り付け行為によって生じたものか、その特定はできず、②各切創の位置関係からみて、1回の切り付け行為によっては生じ得ないことが判明した。

【逮捕後の甲の供述要旨】

1 私は現在30歳で独身である。平成15年4月にT株式会社に就職し、配送課所属のトラック運転手として働いており、会社の独身寮2階に住んでいる。丙は同時期に入社した同僚で、同じ寮の1階に住んでいる。丙は私より2歳年下である。私と丙は日ごろから仲が悪かった。平成17年6月ごろ、私が丙の仕事ぶりに苦情を言ったところ、丙が怒り出してつかみ合いの大げんかになったが、身長165センチメートルの私に比べ、丙は身長180センチメートルくらいあり、体力的に私より勝っていた上に、柔道の経験があったため、私は丙に組み伏せられた。これ以外にも、何度かけんかをしたことがある。

丁も同じ寮の1階に住む仕事仲間で、私より2歳年下である。丁は丙の親友であり、丙が私と仲が悪かったため、丁も私とほとんど口をきかなかった。なお、丁の身長は約170センチメートルで、体力的に私より勝っていたと思う。

2 平成18年2月6日午後6時ごろから、M町内の飲食店で、配送課の懇親会があった。懇親会が終わりかけたとき、ほろ酔い加減になった丙が私に因縁を付けてきた。私が言い返したらけんかになり、私は丙に顔面をこぶしで殴られ、畳の上に身体を押さえ付けられた。この場合は、配送課長の乙さんが仲裁に入ってくれたので、何とか収まった。私は乙さんに「ひと足先に帰宅した方がよい。」と言われたので、懇親会が終わる前に一人で帰った。

3 私は午後8時ごろタクシーで帰宅し、その後、寮2階の自分の部屋でテレビを見ていたところ、午後9時前ごろになって、丙と丁が談笑する声が寮の前の路上から聞こえてきた。私は丙らの笑い声を耳にして怒りが込み上げ、自室のベランダに飛び出して、路上にいた丙らに対し「さっきは何で殴ったんだ。謝れ。」と怒鳴りつけた。すると、丙は「ふざけるな。謝ってほしければ下に降りて来い。」と怒鳴り返してきた。また、丙と一緒にいた丁も「さっさと降りて

## 設問の形式と時間配分

### (設問形式について)

捜査の端緒と関係者の供述要旨を資料として読ませて、どのような犯罪が成立するかを検討させるという問題です。刑事系科目は、全体的に旧司法試験の問題文を長くしたという印象が強く、旧司法試験のテクニックを活かすことができます。

なお、各供述内容は信用できることを前提として、死因となった頸部の傷が甲・乙いずれの行為によって生じたかはあくまで不明であるとしているので、事実認定そのものを受験生に要求する趣旨ではないことを明確にしています。

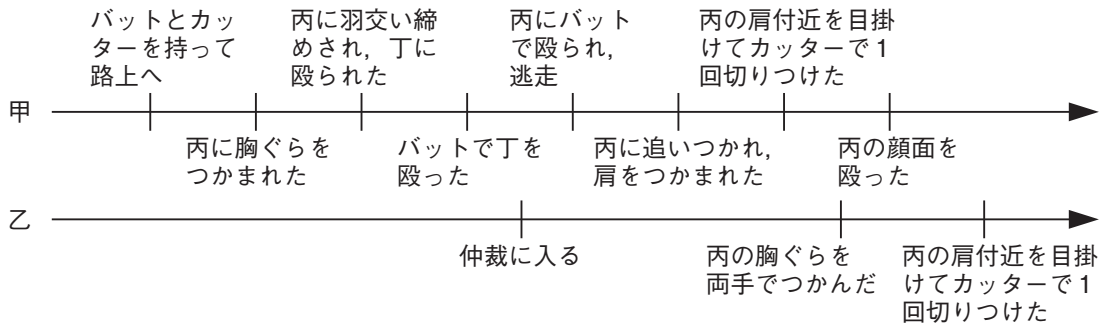
### (時間配分について)

まずは、資料を一通り最後まで読んで、全体像を把握しましょう。この段階ではざっと読む程度で、5分程度で結構です。次に、当事者ごとに行為を抽出しながら、どのような論点が問題となるかに着目しながら、じっくりと読んでいきます。刑法では、この2番目の読み込みが重要です。

あとは答案構成をして答案の形に書き上げていくだけですが、事実のあてはめ（たとえば、防衛行為の相当性や共犯成立の有無の判断）を丁寧に行う必要があるので、答案を書く時間を1時間以上確保しておくべきです。

## 合格答案のポイント

(行為の抽出)



(甲の罪責について)

- 1 先行者である甲の罪責から検討することが常道です。丁をバットで殴った行為は構成要件段階としては傷害罪の構成要件に該当します。しかし、その前に丙に胸ぐらをつかまれたり、丁から殴られたりしているので、正当防衛にあたりうるようにも思われます。もちろん、素手の相手に対してバットで殴っているので、相当性が問題となりますが、本問では、まず、甲がわざわざ丙・丁へ喧嘩を吹っかけたという自招侵害の問題があります。この場合、故意に相手を挑発したとして、積極的加害意思あり、として急迫性の要件を欠く、といった結論を導くことも可能です。いずれにせよ、正当防衛の各要件を丁寧に検討することが求められます。
- 2 次に、甲は、乙が仲裁に入ったことにより、いったん暴行を終了させたにもかかわらず、丙にバットで殴られ

## 【出題の趣旨】

- ① 本問は、捜査経過及び各被疑者ら事件関係者の供述内容等を素材として、これらの証拠関係から認定すべき具体的事実に基づき甲乙両名の罪責を問うことにより、刑事実体法に関する正確な知識と理解、具体的事実への法適用能力及び論理的思考力を試すものである。
- ② まず、甲乙両名の罪責を検討する上で必要な刑事実体法上の問題点を的確に抽出した上、各問題点を解決するに当たって、問題文に明記されているとおり、具体的な事実を示して論じることが要請される。一例を挙げると、甲が丁の左腕をバットで殴打した行為につき、正当防衛ないし過剰防衛の成否を論じる際には、甲は、自分が寮2階の自室から丙及び丁のいる寮の外まで降りて行かない限り、丙及び丁の方から押しかけて来ることはなく、逆に、自分が降りて行けば丙及び丁とけんかになるに違いないと考えていながら、丙及

## 答案構成 詳細版 (平成 18 年度 第 1 問)

### 第 1 甲の罪責

#### 1 丁をバットで殴った行為

##### (1) 傷害罪 (204 条) の構成要件該当性

甲は木製バットを振り回し、丁の左腕を打撃→加療 2 週間を要する傷害

↓

丁は生理的機能に障害

↓

「傷害」(204 条) にあたる

##### (2) 違法性阻却

正当防衛 (36 条 1 項) が成立しないか

##### ア 「急迫不正の侵害」

甲は、降りて行けばけんかになると認識

→侵害を予期している場合に急迫性が認められるか

↓

積極的加害意思の有無で判断

↓

甲は丁に殴られ、丙にも羽交い絞め→急迫不正の侵害

→・頭に血が上ったため自分を抑えることができずに部屋を出たにすぎない

・けんかになれば、やられてしまうとの思いからバットとカッターを持ち出したにすぎない

→積極的加害意思までは認められない

↓

急迫不正の侵害が認められる

##### イ 防衛の意思

防衛の意思：急迫不正の侵害を認識しつつこれを避けようとする単純な心理状態

→単なる攻撃意思とは並存しうる

↓

・立腹して反撃→単なる攻撃意思

・急迫不正の侵害を認識しつつこれを避けようとする単純な心理状態と並存

↓

防衛の意思あり

##### ウ 「やむを得ずにした行為」 (相当性)

やむを得ずにした行為：防衛手段として必要最小限度の行為 (相当性)

↓

・甲は、素手の丁に対してバットという武器で対抗

平成 22 年度  
(2010 年度)

# 第 2 問

本問は、暴力団幹部によるけん銃の組織的な密売事件を題材に、  
設問 1 は、被疑者が公道上のごみ集積所に投棄したごみ袋や、マ  
ンションのごみ集積所に投棄したごみ袋を捜索する行為、メモ片  
を持ち帰って復元する行為、携帯電話の消去されていたデータを  
復元・分析する行為の適法性が問われています。

設問 2 では、被疑者と捜査協力者との会話を録音した ICレ  
コーダーや携帯電話の音声を書写した捜査報告書について、そも  
そも伝聞法則が適用されるか（非伝聞に該当するか否か）、伝聞  
証拠であるとして伝聞例外の要件をみたすかが問題となります。  
さらに、違法収集証拠排除法則も問題となり、おとり捜査の適法  
性、会話の一方当事者が同意している場合の録音の適法性など、  
多くの論点が登場します。

# 問題文

(配点：100)

次の【事例】を読んで、後記〔設問1〕及び〔設問2〕に答えなさい。

## 【事例】

- 1 暴力団A組は、けん銃を組織的に密売することによって多額の利益を得ていたが、同組では、発覚を恐れ一般人には販売せず、暴力団に属する者に対してのみ、電話連絡等を通じて取引の交渉をし、取引成立後、宅配等によりけん銃を引き渡すという慎重な方法が採られていた。司法警察員Pらは、A組による組織的な密売ルートを解明すべく内偵捜査を続けていたが、A組幹部の甲がけん銃密売の責任者であるとの情報や、甲からの指示を受けた組員らが、取引成立後、組事務所とは別の場所に保管するけん銃を顧客に発送するなどの方法によりけん銃を譲渡していると情報を把握したものの、顧客が暴力団関係者のみであることから、甲らを検挙する証拠を入手できずにいた。

平成21年6月1日、Pらは、甲によるけん銃密売に関する証拠を入手するため、A組の組事務所であるアパート前路上で張り込んでいたところ、甲が同アパート前公道にあってごみ集積所にごみ袋を置いたのを現認した。そこで、Pらは、同ごみ袋を警察署に持ち帰り、その内容物を確認したところ、「5/20 1丁→N. H 150」などと日付、アルファベットのイニシャル及び数字が記載された複数のメモ片を発見したため、この裁断されていたメモ片を復元した〔捜査①〕。

さらに、同月2日、Pらは、甲が入居しているマンション前路上で張り込んでいたところ、甲が同マンション専用のごみ集積所にごみ袋を置いたのを現認した。なお、同ごみ集積所は、同マンション敷地内にあるが、居住部分の建物棟とは少し離れた場所の倉庫内にあり、その出入口は施錠されておらず、誰でも出入りすることが可能な場所にあった。そこで、Pらは、同集積所に立ち入り、同所において、同ごみ袋内を確認したところ、「5/22 1丁→T. K 150」などと記載された同様のメモ片を発見したため、このメモ片を持ち帰り復元した〔捜査②〕。

Pらが復元した各メモ片の内容を確認したところ、甲らが、同年5月中に、10名に対して、代金総額2250万円で合計15丁のけん銃を密売したのではないかとこの嫌疑が濃厚となった。

- 2 その後、Pらは、更なる内偵捜査により、A組とは対立する暴力団B組に属する乙が、以前に甲からけん銃を入手しようとしたものの、その代金額について折り合いがつかずにけん銃を入手できなかったため、B組内で処分を受け、甲及びA組に対して強い敵意を抱いているとの情報を入手した。

そこで、Pは、同年6月5日、乙と接触し、同人に対し、もう一度甲と連絡を取ってけん銃を譲り受け、甲を検挙することを手伝ってほしい旨依頼したところ、乙の協力が得られることとなった。この際、Pは、乙に対し、電話で甲に連絡をした際や直接会って話をした際には、甲との会話内容をICレコーダーに録音したいこと、さらに会話終了後には、引き続き、乙にその会話内容を説明してもらい、それも併せて録音したい旨を依頼し、乙の了解を得た。

同月7日午前11時ころ、乙は、乙方近くのE公園において、自らの携帯電話から甲の携帯電話に電話をかけ、甲に対し、「前には金額で折り合わなかったが、やはり物を購入したい。もう一度話し合いたいんだ。」などと言い、甲から、「分かった。値段が張るのはやむを得ない。よく考えてくれよ。」などとの話を引き出した。乙の近くにいたPは、この会話を乙の携帯電話に接続したICレコーダーに録音し、さらに、同会話終了後にされた「自分は、平成21年6月7日午前11時ころ、E公園において、甲と電話で話したが、甲は自分にけん銃を売ることについての話合いに応じてくれた。明日午後1時ころ、F喫茶店で直接会って更に詳しい話合いをすることになった。」という乙による説明も録音した〔録音①〕。

翌8日午後1時ころ、待ち合わせ場所のF喫茶店において、甲と乙は、けん銃の譲渡について話合いをした。その際、甲と乙は、代金総額300万円でけん銃2丁を譲渡すること、けん銃は後日乙の指定したマンションへ宅配便で配送すること、けん銃の受取後、代金を直接甲に支払うことなどを合意するに至った。隣のテーブルにいたPは、このけん銃譲渡に関する会話をICレコーダーに録音し、さらに、甲が同店を立ち去った後にされた「自分は、平成21年6月8日午後1時ころ、F喫茶店で甲と直接話合いをした。甲が自分にけん銃2丁を300万円で売ってくれることになった。けん銃2丁は宅配便で、りんごと一緒に自分のマンションに配送される。代金300万円は後で連絡を取り合って場所を決め、その時渡すことになった。」という乙による説明も録音した〔録音②〕。

- 3 翌9日以降、Pらは、乙がけん銃を受け取ったことを確認し次第、甲をけん銃の譲渡罪で逮捕し、関係箇所を捜索しようと考え、度々乙と電話で連絡を取り、甲からけん銃2丁が配送されてきたか否か確認を続けた。しかし、同月14日午後9時ころ、Pらは、乙が電話に出なくなったことから不審に思い、乙の生命又は身体に危険な事態が発生した可能性があることからその安全を確認するため、乙方マンション管理人立会いの下、乙方に立ち入ると、乙が居間において、頭部右こめかみ付近から出血した状態で死亡しているのを発見した。乙の死体付近にはけん銃2丁が落ちており、その近くには開封された宅配便の箱があり、その中を確認するとりんごが数個入っていた。また、机上には乙の物とみられる携帯電話1台があった。Pらは、甲によるけん銃譲渡の被疑事実について、裁判官から捜索差押許可状の発付を得た上で、発見したけん銃2丁及び携帯電話1台を押収した。さらに、Pらは、押収した乙の携帯電話の発信歴や着信歴を確認したが、すべて消去されていたため、直ちに科学捜査研究所で、消去されたデータの復元・分析を図った〔捜査③〕。その結果、頻繁に発信履歴のある電話番号「090-7274-△△△△」が確認され、さらにこの契約者を捜査すると丙女であることが明らかとなった。なお、Pらは、乙方では遺書等を発見できず、押収したけん銃2丁には乙の右手指紋が付着していたものの、乙が死亡した原因を自殺か他殺か特定できなかった上、捜査の必要から、乙死亡についてマスコミ発表をしなかった。また、宅配便の箱に貼付されていた発送伝票の発送者欄には、住所、人名及び電話番

号が記載されていたが、捜査の結果、それらはすべて架空のものであることが明らかとなった。

- 4 翌15日午後7時ころ、Pらが乙の携帯電話を持参して丙女方を訪ねると、丙女は、当初は乙を知らないと供述したものの、Pらが乙の携帯電話の電源を入れ、丙女の携帯電話番号の発着履歴が頻繁にあったことを告げると、ようやく、乙と約2年前から交際していたことを認め、乙から、今回警察の捜査に協力していることやそのためにA組の甲からけん銃を譲り受けることを打ち明けられていたなどと供述した。そのような事情聴取を継続中に、突然、乙の携帯電話の着信音が鳴った。Pらは、着信の表示番号が以前に乙から教わっていた甲の携帯電話番号であったので、甲からの電話であると分かり、とっさに、丙女から、電話に出ること及び会話の録音についての同意を得た上で、丙女に電話に出てもらうとともに、乙の携帯電話の録音機能を使用して録音を開始した。すると、甲と思われる男の声で、「もしもし、甲だ。物届いだろうか。約束どおりりんごと一緒に届いだろうか。300を早く支払ってくれよ。」との話があり、丙女が、乙が死亡してしまったこと、自分は乙の婚約者であることを告げると、甲と思われる男は、「婚約者なら乙の代わりに代金300万円を用意して持ってこい。物は約束どおり届いたはずだろう。」などと強く言ってきた。Pがメモ紙に代金は警察が用意するので待ち合わせ場所を決めるようにと記載して示すと、丙女は、その記載に従って、「分かりました。代金は、乙に代わって私が用意します。待ち合わせ場所を指定してください。」などと言い、同月17日に甲とF喫茶店で待ち合わせることになった。Pは、電話終了後、乙の携帯電話の録音機能を停止して再生し、丙女と甲と思われる男の会話内容が録音されていることを確認した〔録音③〕。
- 5 同月17日午後3時ころ、丙女がF喫茶店に赴いたところ、甲が現れたので、Pらは、甲をけん銃2丁の譲渡罪で緊急逮捕した。

甲は勾留後、否認を続けたが、検察官は、本件けん銃2丁、甲乙間及び甲丙女間の本件けん銃譲渡に関する〔録音①〕、〔録音②〕及び〔録音③〕を反訳した捜査報告書【資料】、丙女の供述等を証拠に、同年7月8日、甲をけん銃2丁の譲渡罪で起訴した。

被告人甲は、第一回公判期日において、「自分は、乙に対してけん銃2丁を譲り渡したことはない。」旨述べた。その後の証拠調べ手続において、検察官は、「甲乙間の本件けん銃譲渡に関する甲乙間及び甲丙女間の会話の存在と内容」を立証趣旨として、前記捜査報告書を証拠調べ請求したところ、弁護人は、不同意とした。

〔設問1〕 下線部の〔捜査①〕から〔捜査③〕の適法性について、具体的事実を摘示しつつ論じなさい。

〔設問2〕 【事例】中の捜査報告書の証拠能力について、前提となる捜査の適法性を含めて論じなさい。

# 問題文 (重要箇所の強調 ver.)

答案内で検討すべき事実

次の【事例】を読んで、後記〔設問1〕及び〔設問2〕に答えなさい。

## 【事例】

- 1 暴力団A組は、けん銃を組織的に密売することによって多額の利益を得ていたが、同組では、発覚を恐れ一般人には販売せず、暴力団に属する者に対してのみ、電話連絡等を通じて取引の交渉をし、取引成立後、宅配等によりけん銃を引き渡すという慎重な方法が採られていた。司法警察員Pらは、A組による組織的な密売ルートを解明すべく内偵捜査を続けていたが、A組幹部の甲がけん銃密売の責任者であるとの情報や、甲からの指示を受けた組員らが、取引成立後、組事務所とは別の場所に保管するけん銃を顧客に発送するなどの方法によりけん銃を譲渡しているとの情報を把握したものの、顧客が暴力団関係者のみであることから、甲らを検挙する証拠を入手できずにいた。

平成21年6月1日、Pらは、甲らによるけん銃密売に関する証拠を入手するため、A組の組事務所であるアパート前路上で張り込んでいたところ、甲が同アパート前公道上にあったごみ集積所にごみ袋を置いたのを現認した。そこで、Pらは、同ごみ袋を警察署に持ち帰り、その内容物を確認したところ、「5/20 1丁→N. H 150」などと日付、アルファベットのイニシャル及び数字が記載された複数のメモ片を発見したため、この裁断されていたメモ片を復元した[捜査①]。

さらに、同月2日、Pらは、甲が入居しているマンション前路上で張り込んでいたところ、甲が同マンション専用のごみ集積所にごみ袋を置いたのを現認した。なお、同ごみ集積所は、同マンション敷地内にあるが、居住部分の建物棟とは少し離れた場所の倉庫内にあり、その出入口は施錠されておらず、誰でも出入りすることが可能な場所にあった。そこで、Pらは、同集積所に立ち入り、同所において、同ごみ袋内を確認したところ、「5/22 1丁→T. K 150」などと記載された同様のメモ片を発見したため、このメモ片を持ち帰り復元した[捜査②]。

Pらが復元した各メモ片の内容を確認したところ、甲らが、同年5月中旬に、10名に対して、代金総額2250万円で合計15丁のけん銃を密売したのではないかとこの嫌疑が濃厚となった。

- 2 その後、Pらは、更なる内偵捜査により、A組とは対立する暴力団B組に属する乙が、以前に甲からけん銃を入手しようとしたものの、その代金額について折り合いがつかずにけん銃を入手できなかったため、B組内で処分を受け、甲及びA組に対して強い敵意を抱いているとの情報を入手した。

そこで、Pは、同年6月5日、乙と接触し、同人に対し、もう一度甲と連絡を取ってけん銃を譲り受け、甲を検挙することを手伝ってほしい旨依頼したところ、乙の協力が得られることとなった。この際、Pは、乙に対し、電話で甲に連絡をした際や直接会って話をした際には、甲との会

平成  
22  
年度

話内容をＩＣレコーダーに録音したいこと、さらに会話終了後には、引き続き、乙にその会話内容を説明してもらい、それも併せて録音したい旨を依頼し、乙の了解を得た。

同月７日午前１１時ころ、乙は、乙方近くのＥ公園において、自らの携帯電話から甲の携帯電話に電話をかけ、甲に対し、「前には金額で折り合わなかったが、やはり物を購入したい。もう一度話し合いたいんだ。」などと言い、甲から、「分かった。値段が張るのはやむを得ない。よく考えてくれよ。」などとの話を引き出した。乙の近くにいたＰは、この会話を乙の携帯電話に接続したＩＣレコーダーに録音し、さらに、同会話終了後にされた「自分は、平成２１年６月７日午前１１時ころ、Ｅ公園において、甲と電話で話したが、甲は自分にけん銃を売ることについての話合いに応じてくれた。明日午後１時ころ、Ｆ喫茶店で直接会って更に詳しい話合いをするようになった。」という乙による説明も録音した〔録音①〕。

翌８日午後１時ころ、待ち合わせ場所のＦ喫茶店において、甲と乙は、けん銃の譲渡について話合いをした。その際、甲と乙は、代金総額３００万円でけん銃２丁を譲渡すること、けん銃は後日乙の指定したマンションへ宅配便で配送すること、けん銃の受取後、代金を直接甲に支払うことなどを合意するに至った。隣のテーブルにいたＰは、このけん銃譲渡に関する会話をＩＣレコーダーに録音し、さらに、甲が同店を立ち去った後にされた「自分は、平成２１年６月８日午後１時ころ、Ｆ喫茶店で甲と直接話合いをした。甲が自分にけん銃２丁を３００万円で売ってくれることになった。けん銃２丁は宅配便で、りんごと一緒に自分のマンションに配送される。代金３００万円は後で連絡を取り合って場所を決め、その時渡すことになった。」という乙による説明も録音した〔録音②〕。

- ３ 翌９日以降、Ｐらは、乙がけん銃を受け取ったことを確認し次第、甲をけん銃の譲渡罪で逮捕し、関係箇所を捜索しようと考え、度々乙と電話で連絡を取り、甲からけん銃２丁が配送されてきたか否か確認を続けた。しかし、同月１４日午後９時ころ、Ｐらは、乙が電話に出なくなったことから不審に思い、乙の生命又は身体に危険な事態が発生した可能性があることからその安全を確認するため、乙方マンション管理人立会いの下、乙方に立ち入ると、乙が居間において、頭部右こめかみ付近から出血した状態で死亡しているのを発見した。乙の死体付近にはけん銃２丁が落ちており、その近くには開封された宅配便の箱があり、その中を確認するとりんごが数個入っていた。また、机上には乙の物とみられる携帯電話１台があった。Ｐらは、甲によるけん銃譲渡の被疑事実について、裁判官から捜索差押許可状の発付を得た上で、発見したけん銃２丁及び携帯電話１台を押収した。さらに、Ｐらは、押収した乙の携帯電話の発信歴や着信歴を確認したが、すべて消去されていたため、直ちに科学捜査研究所で、消去されたデータの復元・分析を図った〔捜査③〕。その結果、頻繁に発信履歴のある電話番号「０９０－７２７４－△△△△」が確認され、さらにこの契約者を捜査すると丙女であることが明らかとなった。なお、Ｐらは、乙方では遺書等を発見できず、押収したけん銃２丁には乙の右手指紋が付着していたものの、乙が死亡し

た原因を自殺か他殺か特定できなかった上、捜査の必要から、乙死亡についてマスコミ発表をしなかった。また、宅配便の箱に貼付されていた発送伝票の発送者欄には、住所、人名及び電話番号が記載されていたが、捜査の結果、それらはすべて架空のものであることが明らかとなった。

- 4 翌15日午後7時ころ、Pらが乙の携帯電話を持参して丙女方を訪ねると、丙女は、当初は乙を知らないと供述したものの、Pらが乙の携帯電話の電源を入れ、丙女の携帯電話番号の着信履歴が頻繁にあったことを告げると、ようやく、乙と約2年前から交際していたことを認め、乙から、今回警察の捜査に協力していることやそのためにA組の甲からけん銃を譲り受けることを打ち明けられていたなどと供述した。そのような事情聴取を継続中に、突然、乙の携帯電話の着信音が鳴った。Pらは、着信の表示番号が以前に乙から教わっていた甲の携帯電話番号であったので、甲からの電話であると分かり、とっさに、丙女から、電話に出ること及び会話の録音についての同意を得た上で、丙女に電話に出てもらおうとともに、乙の携帯電話の録音機能を使用して録音を開始した。すると、甲と思われる男の声で、「もしもし、甲だ。物届いだろう。約束どおりりんごと一緒に届いだろう。300を早く支払ってくれよ。」との話があり、丙女が、乙が死亡してしまったこと、自分は乙の婚約者であることを告げると、甲と思われる男は、「婚約者なら乙の代わりに代金300万円を用意して持ってこい。物は約束どおり届いたはずだろう。」などと強く言ってきた。Pがメモ紙に代金は警察が用意するので待ち合わせ場所を決めるようにと記載して示すと、丙女は、その記載に従って、「分かりました。代金は、乙に代わって私が用意します。待ち合わせ場所を指定してください。」などと言い、同月17日に甲とF喫茶店で待ち合わせるようになった。Pは、電話終了後、乙の携帯電話の録音機能を停止して再生し、丙女と甲と思われる男の会話内容が録音されていることを確認した〔録音③〕。

- 5 同月17日午後3時ころ、丙女がF喫茶店に赴いたところ、甲が現れたので、Pらは、甲をけん銃2丁の譲渡罪で緊急逮捕した。

甲は勾留後、否認を続けたが、検察官は、本件けん銃2丁、甲乙間及び甲丙女間の本件けん銃譲渡に関する〔録音①〕、〔録音②〕及び〔録音③〕を反証した捜査報告書【資料】、丙女の供述等を証拠に、同年7月8日、甲をけん銃2丁の譲渡罪で起訴した。

被告人甲は、第一回公判期日において、「自分は、乙に対してけん銃2丁を譲り渡したことはない。」旨述べた。その後の証拠調べ手続において、検察官は、「甲乙間の本件けん銃譲渡に関する甲乙間及び甲丙女間の会話の存在と内容」を立証趣旨として、前記捜査報告書を証拠調べ請求したところ、弁護人は、不同意とした。

〔設問1〕 下線部の〔捜査①〕から〔捜査③〕の適法性について、具体的事実を摘示しつつ論じなさい。

〔設問2〕 【事例】中の捜査報告書の証拠能力について、前提となる捜査の適法性を含めて論じなさい。

## 設問の形式と時間配分

### (設問形式について)

例年通り、捜査の適法性に関する問題と証拠能力に関する問題が1題ずつ出題されました。全体の分量は、これまでよりも少し多い5頁でした。

### (時間配分について)

刑事訴訟法は、設問1と設問2の配点割合が明示されていません。そのため、両方を同じ配分で書くことが基本となるでしょう。

ただ、本問では、伝聞法則だけでなく「前提となる捜査の適法性」まで問われている設問2の方がボリューム的に多くなります。設問2で時間不足になった受験生も多く、設問2の答案を書き始める時点で、50分以上残っている状況（つまり、答案構成と設問1の答案作成を1時間10分以内に完了させる状況）でないと最後まで書き切るのは難しかったようです。

【資料】

## 捜査報告書

平成21年6月18日

〇〇県〇〇警察署

司法警察員 警視

P 殿

〇〇県〇〇警察署

司法警察員 巡査部長

K ㊟

被疑者

甲

(本籍, 住居, 職業, 生年月日省略)

上記の者, 平成21年6月17日, 銃砲刀剣類所持等取締法違反被疑事件の被疑者として緊急逮捕したものであるが, 被疑者は, 乙及び丙女との間で電話等による会話をしており, その状況を録音したICレコーダー及び携帯電話を本職が再生して反訳したところ, 下記のとおり判明したので報告する。

### 記

1 平成21年6月7日午前11時ころ～午前11時5分ころ, 電話による通話等

(1)乙 「もしもし, 乙ですが, この間は申し訳なかったね。」

「やはり, 物必要なんだ。前には金額で折り合わなかったが, やはり物を購入したい。」

もう一度話し合いたいんだ。」

甲 「今更何言ってるの。物って何のことよ。」

乙 「とぼけないでくださいよ。×××のことですよ。」

甲 「前は, 高過ぎるとか, ほんとに良い物なのかとか, うるさかったじゃない。うちのは××××とは違うんだよ。」

乙 「悪かったね。やはりどうしても欲しいんだ。助けてほしい。」

甲 「分かった。うちの回転×××の×××は物が良いので, 値段が張るのはやむを得ない。よく考えてくれよ。」

乙 「よく分かったよ。明日1時に前回と同じF喫茶店でどうだい。」

甲 「分かった。明日会おう。」

ここで, 甲乙間の会話が終了し (なお×××部分は聞き取れず), 引き続き, 乙の声で,

(2)乙 「自分は, 平成21年6月7日午前11時ころ, E公園において, 甲と電話で話したが,

甲は自分にけん銃を売ることについての話合いに応じてくれた。明日午後1時ころ, F喫茶店で直接会って更に詳しい話合いをすることになった。」との話が録音されていた。

## 合格答案のポイント

(設問1について)

- 1 捜査①②に関しては、Pらが、ごみ袋やごみ袋内のメモ片を持ち帰ったり、メモ片を復元したりした行為が、領置及びそれに伴う処分として適法といえるかが問題となるでしょう。

その際、公道上のごみ集積所に排出されたごみ袋を領置した行為の適法性について判断した最決平成20年4

### 【出題の趣旨】

- ① 本問は、捜査・公判に関する具体的事例を示して、そこに生起する刑事手続上の問題点の解決に必要な法解釈、法適用にとって重要な具体的事実の分析・評価及び具体的帰結に至る過程を論述させることにより、刑事訴訟法等の解釈に関する学識、適用能力及び論理的思考力を試すものである。
- ② 事例は、暴力団幹部らによるけん銃の組織的な密売事件を素材とし、設問1は、警察官が、暴力団A組幹部である被疑者甲がA組の組事務所であるアパート前公道上のごみ集積所に投棄したごみ袋や、自宅マンションのごみ集積所に投棄したごみ袋から発見したメモ片を持ち帰り復元する行為、さらに搜索差押許可状に基づいて差し押さえた携帯電話の消去されていたデータを復元・分析する行為について、その適法性を論じさせることにより、刑事訴訟法第221条の定める遺留物の領置、同法第218条第1項の定める搜索、差押え及び検証についての正確な理解と具体的事実への適用能力を試すものである。
- ③ 刑事訴訟法第221条は、被疑者その他の者が遺留した物を令状なく領置することを認めているが、設問1の捜査①及び②では、本問のごみが遺留物といえるか、いえるとして捜査機関は何らの制限なくこれを領置することができるか問題となり、

## 答案構成 (平成 22 年度 第 2 問)

### 第 1 設問 1 について

#### 1 捜査①②の適法性

- (1)ア 公道上に投棄されたごみ袋を持ち帰る行為は「領置」(221 条)にあたり、令状なしで行いうるか

↓

自己の意思によらず占有を喪失した場合に限られず、自己の意思によって占有を放棄したものも含む

↓

本件ごみは占有放棄されたものとして、遺留物にあたる

- イ ごみ排出者は「通常そのまま収集されて他人にその内容をみられることはないという期待」を抱いている

→プライバシー権として、微弱ながらも権利性を有する

↓

捜査の必要が要保護性を上回る場合には領置として適法

→判断基準：ごみの領置の必要性、緊急性、具体的状況下における相当な手段

- (2) 捜査①の適法性

本件では、

- ・けん銃密売という重大な犯罪なのに、証拠が見つからない(必要性、緊急性)
- ・ごみが投棄されたのは誰もが通る公道上で、甲が置いたのを見届けてから持ち帰っており手段は相当

↓

適法

- (3) 捜査②の適法性

- ・①と異なり、マンションの敷地内にある集積所
- ・もっとも、その出入口は施錠されておらず、誰でも自由に出入り可能
- ・甲が置いたのを現認した上で持ち帰っており、手段は相当

↓

適法

#### 2 捜査③の適法性

消去されたデータの復元・分析は搜索差押許可状(218 条 1 項)の効果として認められるか、それとも新たな権利侵害に該当し、別途令状の請求が必要か

↓

本件では、データを可視性ある状態に復元

→内容の変更などは伴わない

↓

第 1 設問 1

1 捜査①②について

(1) 捜査①②は適法か。捜索差押えを行うには令状が必要である (刑事訴訟法 218 条 1 項) にもかかわらず、P らのゴミ袋を警察署に持ち帰る行為は令状なしで行われているため、令状主義との関係で問題となる。

この点、令状主義 (憲法 35 条) の趣旨は、恣意的な強制処分から被疑者の人権を保護する点にある。しかし、被疑者等が「遺留した物」であれば、令状が無くとも領置可能である (法 221 条)。そこで、ゴミが遺留物といえるかを検討する。

221 条の趣旨は占有取得の過程に強制の要素が認められない点にある。よって、遺留物とは占有取得の過程に強制の要素が認められない物、すなわち自己の意思によって占有を放棄したものを含むと解する。

本件ゴミは甲が自己の意思で占有を放棄したものと見え、遺留物にあたる。

(2) この点、ゴミが遺留物に該当するとしても、排出者は通常そのまま収集されて他人にその内容を見られることはないという期待を抱いている。他方、ゴミには多くの情報が含まれている可能性が高く、捜査の必要性が高い。

そこで、ゴミを持ち帰る行為の必要性、緊急性、具体的状況下における手段の相当性を踏まえて、捜査の必要性が排出者の期待を上回る場合には、ゴミを持ち帰る行為も領置として適法と解すべきである。

(3) まず、捜査①は適法か。本件においては、けん銃密売という重大な犯罪にもかかわらず、P らは甲を検挙する証拠を入手できずにいたため、必要性、緊急性が高い。

また、ゴミが投棄されたのは誰もが通る公道上であり、誰にも見られないという甲の期待は低くなる。さらに P は、甲が置いたのを現認した上で回収しているから、手段としても相当である。

◀ 捜査①②について総論は合わせて論じて、あてはめの点で区別する書き方は、①と②の比較が理解しやすくよい

◀ ごみ袋を持ち帰り復元する行為が、遺留物の領置として適法か、という問題意識に気付いている

◀ けん銃密売事件という重大犯罪でありながら、通常の捜査方法では摘発が困難であったという点が示されている

◀ ゴミの捨てられた場所が公道であったという具体的状況について論じられている

## 再現答案 (平成22年度 第2問 刑事系 166位相当)

### 第1 設問1

#### 1 捜査①の適法性

- (1) 捜査①が強制処分であれば、令状なくして行われた点で刑事訴訟法197条1項但書に反し違法となる。そこで、捜査①は強制処分か、強制処分の意義が問題となる。

ア この点、科学技術の発達した現代においては、有形力を行使しなくても人権は侵害されるので、人権保障(1条)の見地から、強制処分とは、個人の重要な権利・利益を制約する処分をいうものと解する。

イ これを本件についてみると、当該ゴミ袋は公道上という通行人の目につき、かつ持ち去ることも可能な場所に置かれていたものであり、そのプライバシー権の期待は非常に低いものである。よって、当該ゴミ袋を持ち帰り、メモ片を復元しても重要な権利・利益を制約するものとはいえず、捜査①は強制処分とはいえない。

- (2)ア そうだとすると、捜査①は任意処分ということになるが、かかる任意処分によっても個人の人権が侵害されることがありうるので、適正手続(憲法31条)の観点から、必要性・緊急性が認められる状況下で、相当といえるもののみ任意捜査の限界内にあるものとして適法となるものと解する。

イ(ア) 必要性

まず、本件では暴力団A組による拳銃の組織的密売事件という重大な犯罪が疑われている。しかも、PらはかかるA組の犯罪について様々な情報を入手しており、その嫌疑は濃厚である。また、当該犯罪の顧客は暴力団関係者のみであり、甲らを検挙する証拠を入手することができずにいたことから、当該捜査をして証拠を入手する必要も高かったといえる。さらに、当該メモ片には1丁という拳銃の単位やイニシャルというが書かれ、拳銃の密売の記録を疑わせる記載があり、重要な証拠となりうるものであった。以上より、捜査①をする必要性はある

◀ ゴミ袋を持ち帰る行為が領置にあたるかについて、一切触れられていない。この点は出題の趣旨から乖離しているので減点対象だが、同じような答案が少なからず存在したという採点実感から判断すると、差はつかなかったと思われる

◀ 捜査の必要性と甲のプライバシー権とを対立させて論じている点は適切である

1ページ

でかつ重大な犯罪が問題となっており、秘密録音をする  
必要性・緊急性・相当性が認められる。よって、当該録  
音は任意捜査の限界内といえ、適法である。

(3) 以上より、当該捜査報告書は証拠禁止とならず、証拠能力  
が認められる。

以 上

◀ 必要性・緊急性・手段  
の相当性について、よ  
り事実に則したあては  
めができると、なおよ  
かった

### 【講評】

- ★ 設問1において、ごみ袋を持ち帰ったり、ごみ袋を搜索してメモ片を差し押さえたり、といった行為が任意処分 of 限界として許されるか、を具体的に論じている。もっとも、捜査③の、消去されたデータの復元・分析については、搜索差押許可状の効力として許されるか、という観点での検討がなく、減点になったと思われる。
- ★ 設問2において、甲乙間の会話・甲丙間の会話部分と、乙の説明部分とを区別して、真実性が問題となるか否かを検討している点は、非常に好印象。おとり捜査や秘密録音の適法性についても、必要十分な検討がされている。

■第2問単独で評価した場合、200 位程度の優秀答案。

## 【刑事系科目】

## 〔第1問〕

- ① 本問は、A病院の入院患者Vが薬の誤投与に起因して死亡したという具体的事例について、Vを看護していた妻の甲、担当していた看護師乙及び薬剤師丙の罪責を問うことにより、刑事実体法及びその解釈論の理解、具体的事案に法規範を適用する能力及び論理的思考力を試すものである。
- ② 第1に、甲の罪責については、甲がVの異状を認識しながら、看護師乙ら病院関係者に連絡することなく放置し、結局Vを死亡させたことについて、いかなる刑法上の罪が成立するかが問題となる。
- ③ まず、甲が乙による巡回を妨害するなどの積極的な行為に及んでいるので、甲の行為を不作為、作為のいずれととらえるのが問題となる。
- ④ 不作為とする場合は、不作為による殺人罪又は保護責任者遺棄致死罪の成否が問題となる。
- 両罪を区別する基準として、殺意の有無によるとする考え方、作為義務の程度によるとする考え方などがあるが、いずれの立場に立ったとしても、後述する殺意の有無など関連する事実を認定しつつ、事案への当てはめを行うことが求められる。
- ⑤ 次に、不作為による殺人罪又は保護責任者遺棄致死罪の成否を検討する場合には、作為義務ないし保証人的地位の発生根拠（基礎付け事情）に関する考え方を示すことが必要となる。ところ、作為義務の発生根拠については、多元的に理解するのが一般であり、法令、契約及び条理のほか、先行行為、事実上の引受け、排他的支配領域性に求めるなどの様々な考え方があり、それらを踏まえて自らの見解を明らかにすることになる。
- ⑥ 甲に対する作為義務の有無の検討においては、単に甲がVと夫婦関係にあり、民法上の扶助義務を負うことだけで足りるのではなく、甲が午後2時に乙の巡回（容体確認）を妨害したことなど、具体的事情を丁寧に拾いつつ、その事情が作為義務の発生根拠との関係でどのような意味を持つのか明らかにする必要がある。また、VがA病院に入院中の患者であり、Vに対する看護義務は第一次的には乙ら病院側にあることを踏まえ、どのような事情があれば甲に作為義務が認められるかを論ずることが肝要である。
- ⑦ 甲に作為義務が認められるとしても、その作為義務の内容、作為可能性・容易性についても検討する必要があるほか、甲の不作為とVの死亡という結果との間の因果関係について、不作為犯の特殊性を踏まえて、

事例に即して論ずることになる。

- ⑧ さらに、甲に対して不作為による殺人罪の成立を肯定するためには、殺意（故意）の検討が必要となる。甲は、Vの危険な状態を認識しながらも、Vの介護から解放されたいと思う一方で、長年連れ添ったVを失いたくないという複雑な気持ちを抱き、その間で感情が揺れ動いているので、結果の発生に対する認識・認容が必要とする認容説（判例）など自らの立場を明らかにしながら、具体的事例における当てはめを行うことになる。
- ⑨ 殺意を認定する場合には、その成立時期についても留意する必要がある。なぜなら、殺人罪が成立するには、殺意が肯定されることに加え、作為義務の発生時期、救命可能性が認められる時期（午後2時20分まで）との関係も踏まえ、これらがすべて満たされる必要があるからである。
- ⑩ 第2に、乙丙の罪責については、乙と丙が医師Bの処方したとおりのE薬ではなくD薬を投与した上、乙がBの指示どおりにVの容体確認をしなかったため、Vが死亡するに至っていることから、乙丙それぞれについて業務上過失致死罪の成否を検討することになる。
- ⑪ まず、前提として、業務上過失致死罪（刑法第211条第1項）の「業務」についての判例の理解を踏まえつつ、これを、看護師、薬剤師という乙、丙それぞれの仕事の特性を考慮しつつ当てはめを行うことになる。
- ⑫ 次に、過失犯の理論について、事案の解決に必要な限度で簡潔に自らの考え方を明らかにした上、事例に即して、乙丙に課せられる具体的な注意義務の内容を特定する必要がある。特に、乙については、誤った薬の投与という行為だけでなく、医師Bに指示されたとおりの巡回を行わなかったことも認められるので、それぞれの行為について具体的な注意義務を検討すべきである。
- ⑬ その上で、問題文中の具体的事情を摘示しつつ、乙丙のVの死亡という結果に対する予見可能性や、結果回避可能性・結果回避義務違反について検討すべきである。
- ⑭ さらに、乙丙に対してV死亡の結果の責任を問うためには、乙丙の薬品の投与に係る過失行為の後に甲の（不作為による殺人行為又は保護責任者遺棄行為という）故意行為が介在している（丙の場合は、それに加えて乙の過失行為も介在している。）ことから、因果

## 司法試験 系統別・年度別 論文過去問徹底解析 刑事系

---

2011年9月30日 第1版 第1刷発行

編著者●株式会社 東京リーガルマインド

LEC総合研究所 司法試験部

---

発行所●株式会社 東京リーガルマインド

〒164-0001 東京都中野区中野 4-11-10

アーバンネット中野ビル

☎03(5913)5011 (代 表)

☎03(5913)6336 (出版部)

☎048(999)7581 (書店様用受注センター)

振 替 00160-8-86652

[www.lec-jp.com/](http://www.lec-jp.com/)

---

表紙デザイン●株式会社エディボック

印刷・製本●株式会社サンヨー

---

©2011 TOKYO LEGAL MIND K.K., Printed in Japan

ISBN978-4-8449-3666-4

### 複製・頒布を禁じます。

本書の全部または一部を無断で複製・転載等することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版者の権利侵害になりますので、その場合はあらかじめ弊社あてに許諾をお求めください。

なお、本書は個人の方々の学習目的で使用していただくために販売するものです。弊社と競合する営利目的での使用等は固くお断りいたしております。

落丁・乱丁本は、送料弊社負担にてお取替えいたします。出版部までご連絡ください。

ISBN978-4-8449-3666-4

C3332 ¥3800E



9784844936664

定価3,990円 本体3,800円 + 税5%  
LD03666



1923332038000

問題文の重要箇所を指摘し

**長文事例問題への対応力を向上**

全ての問題に合格答案作成のポイントを記載し

**答案のセルフチェックが可能**

法務省発表の関連資料を全て掲載し

**合格答案作成に必要な情報を網羅**

▶ 司法試験の詳細情報はLEC司法試験専用サイトをチェック!

<http://www.lec-jp.com/shinshihou/>

▶ 予備試験受験生の方はLEC予備試験専用サイトもチェック!

[http://www.lec-jp.com/yobi\\_shiken/](http://www.lec-jp.com/yobi_shiken/)